ジーメンス事務所の防空壕とラーベ

荒城の新年

――一九三七年十二月三十一日～一九三八年一月十二日

十二月三十一日

今日、うちの難民（男二人）が、外をぶらついていたところを日本兵に連れていかれて、略奪品を運ばせられた。昼、家にもどると、かみさんのひとりがひざまずいて訴えた。「お願いです！　うちの人を連れ戻してください。でないと、殺されてしまいます！」みるも哀れな姿だった。しかたなく私はそのかみさんを車に乗せて、中山路でようやく連中を見つけた。

武装した兵隊二十人とむきあう。案の定二人を引き渡そうとはしない。私の立場はちょっと具合の悪いものだった。なんとか連れ戻すことができたときには心底ほっとした。

家に戻ってから難民を集めて、この二人のおろか者をみなの前で叱りとばした。ばかなことをして捕まっても知らんからな。六百三十人もいる人間のあとをそのたびに追っかけちゃ

いられない。いったい何のためにここに逃げてきたんだ？　また私が助けに行くと思ったら大まちがいだ。こんなことが続いたら、いずれ取り返しのつかないことになる……。

日本兵は、新年に三日、休みをもらう。兵たちがうろつかないように安全区を封鎖するとかいっていたが、あてになるもんか。明日は、一九三八年一月一日。いよいよ「自治委員会」がおごそかに樹立される。

一九三八年一月一日

昨日の夜九時半、七人の同志が年始に来た。アメリカ人のフィッチ、スマイス、ウィルソン、ミルズ、ベイツ、マッカラム、リッグズの面々だ。手元に残った最後の赤ワインをあけ、一時間ほどおしゃべりした。日頃は意気軒昂のベイツが、疲れはてて眠りこんでしまったので、はやめにお開きになった。私にも中国人の客にとっても休養をとることに異存はなかったから、そろって十一時に寝た。

朝七時ごろ、張がきた。かみさんの容態が悪化したという。私は大急ぎで服を着て、鼓楼病院へ連れて行った。三回目だ。

家に戻ると、盛大な歓迎が待っていた。うちの難民たち「老百姓（ラオバイシン）」（中国語で名もなき民の意）はずらりと両側に並び、私に敬意を表して、日本軍からもらった何千もの爆竹をいっせいに鳴らした。こうして新しい自治政府を祝うのだ。それから六百人全員で私を取り囲

み、白い包装紙に朱液で書かれた年賀状を手渡し、いっせいに三度お辞儀をした。ありがとう、とうなずいて私が年賀状を折り畳み、ポケットにつっこむと、まわりから歓声があがった。残念ながら、大きすぎてとてもこの日記帳にはおさめられない。中国人の友人が訳してくれたところによると、

ラーベさんへ
どうか良い年でありますよう
一億があなたのそばにいます！

収容所の難民たち
一九三八年

この「一億」がどういう意味なのか、いまだに私にはよくわからない。たぶんこれは「一億人の善男善女」の意味だろう。張に聞くと、こともなげにいった。

「ドイツ語で新年おめでとうっていうことですよ！」

火花の雨のあとは、使用人とジーメンスの従業員が総出で行列をつくり、おごそかに慣例の新年の叩頭（こうとう）の礼をした。

午後、シュペアリングとリッグズが年始に来たので葉巻を一本ずつ進呈する。豪華な贈り

物だ。今では葉巻一本が五ドルから七ドルもする。そのほか、シュペアリングには安全カミソリも。最近盗まれたからだ。

夜の九時に日本兵がトラックに乗ってやってきて女を出せとわめいた。戸を開けないでいたらいなくなった。見ていると中学校へむかった。あそこはたえず日本兵におそわれている。私は庭の見張りをいっそう厳重にして、二人組の歩哨に警笛を持たせた。こうしておけば、いつお越し下さってもすぐに馳せ参じられる。だが、ありがたいことに、今晩は無事に過ぎた。

一月二日

本部の隣の家に日本兵が何人も押し入り、女の人たちが塀を越えてわれわれのところへ逃げてきた。クレーガーは、防空壕の上からひらりと塀をとび越えた。塀はひじょうに高いのだが、警官がひとり手伝ってくれたので、私もあとを追おうとした。ところが二人ともバランスを崩して落ちてしまった。さいわいかなり太い竹の上だったので、竹が折れただけで、けがをせずにすんだ。その間にクレーガーは兵たちをとっつかまえた。やつらはあわてふためいて逃げていった。ただちょっと様子を見にきただけだ、というのだ！

銃剣でのどを突かれた近所の奥さんを私が鼓楼病院に送りこんだのだが、今日ようやく退

院が許された。入院費は一日当たりたった八十セント。その十日分だ。お金がないというので、私がかわりに払った。

日本軍の略奪につぐ略奪で、中国人は貧乏のどん底だ。自治委員会の集会がきのう、鼓楼病院で開かれた。演説者が協力ということばを口にしているそばから、病院の左右両側で家が数軒焼けた。軍の放火だ。

自治委員会の副代表孫（ソン）氏は日本語を話す。また紅卍字会のメンバーでもあるが、その孫氏がもったいぶって私にいった。「ある重要な件につき、近いうちにお話ししたいのですが」どうぞどうぞ！　とっくに心づもりはできている。お宅たちがなにを狙ってるのかなんざ、お見通しだよ！

安全区の通りは、あいかわらず見渡すかぎりの人の海だ（写真20）。何千というおびただしい人々が道ばたにたたずんでいる。値段の交渉をしている人もある。道路の両側には行商人が鈴なりになって、食料品、タバコ、古い衣服を売っている。

だれもが日本の腕章や国旗をつけてとび回っている。横町や道路の間の空き地には、藁（わら）小屋が所せましと建ち並び、難民村ができている。わが家と同じ光景だ。うちの庭には、もはや草一本生えていない。美しかった生け垣もあっという間に踏みつぶされ、見る影もなくなった。なにしろ大人数だ、しかたあるまい。なによりまず生きることが先決なのだ！

昨夜、またしても日本兵の乱暴があいついだ。スマイスが書きとめ、いつものように抗議

書として日本大使館に提出した。

我々がひそかにおそれていたことがついに起こった。中国の爆撃機がやってきたのだ。といったからといって、けっして友人としてではない。敵としてだ！　かつての日本軍のように、時間どおりに爆弾を落としていく。だが、いままでのところ、幸いなことにたいていは同じ場所、つまり南の飛行場かその近くに限られている。日本の防空部隊が姿を現したが、人数も少なく、いとも手薄だった。

空襲がこのまま安全区の外にとどまるかどうかは、あとになってみないとわからない。だが、そうであってほしい。さもないと、いままでよりもっと悲惨なことになるかもしれないのだ。いまの安全区の混み具合ときたら、日中は上海よりすごい。そんなところに一発爆弾が落ちたが最後、ものすごい数の人命が失われるのだ。そう思っただけでぞっとする。

一月三日

きのう夜七時に、スマイスがフィッチあての報告書を手に医者の許伝音氏のところからやってきた。

フィッチ様！

本日午後四時三十分ごろ、劉培坤は、暴行されそうになった妻を守ろうとして日本兵に射殺されました。

近所の家が日本兵に占領されているため、わが家はいま、逃げてきた婦人たちでいっぱいです。私はシュペアリング氏に手紙を書き、すぐにこちらへきて我々を守って下さるようお願いしました。シュペアリング氏の体があかない場合、ここ寧海路五号に、だれか他の外国人をさしむけていただけないでしょうか？

敬具

許伝音

本部に泊まりこんでいるはずのシュペアリングをスマイスが探しに行っている間、私はマギーといっしょに日本大使館へ行った。マギーはすでにこの件について詳しい報告を受けていた。田中氏に軍部に出向いてもらい、この事件を調査するよう要求してもらうのだ。これは実に計画的で残虐な犯行だ。

劉の妻がおそわれたのは昨日の朝だった。五人の子どもがいる。夫がかけつけ、日本兵の横っ面をはって追い払った。午後、朝は丸腰だったその兵士は、今度はピストルを持ってやってきて、台所に隠れていた劉をひきずりだした。近所の人が必死で命乞いをし、ある者は足もとにひれ伏してすがった。だが日本兵は聞き入れなかった。

田中氏は、ただちに軍部に報告すると約束した。私も氏が約束を果たさなかったとは思っ

ていない。だが結局、沙汰やみだ。兵士の処罰といえば、いつだってたかだか平手打ちどまり。それ以上こらしめたという話を聞いたことがない。

せめてもの慰めのつもりだろう、田中氏は、そのあととてもうれしいことを教えてくれた。目下無湖にいるローゼン、それからたぶんヒュルターとシャルフェンベルクの三人が、一月五日に南京に到着するそうだ。ということは、アメリカ大使館の人たちと同じ日だ。そちらからはすでに連絡がきている。

クレーガーは紫金山にいった。天文台は粉々になり、頂上に行く道もかなりひどいことになってはいたが、通れないわけではない。なにもそんなところに行かなくてもいいのに。わざわざ危ない目にあうことはない。のっぴきならない事情でもあれば別だが。ま、だれかあいつにそういってやってくれ！

今日は二階の風呂場でも水がでた。正午には、安全区のあちこちで電気もついたのだが、一時ごろになってまたとまってしまった。たぶん、我々にラジオのニュースを聞かせないためだろう。

給食所と収容所の決算報告で、委員会の財政がかならずしも楽ではないことがわかったが、これには改めてうなってしまった。要するに、働いている中国人がめいめいしっかり手数料を取っていたのだ。なんせここは中国だ。手数料なしにはなにひとつ運ばない。

今日うちの庭で、とほうもない値段をふっかけようとした野菜売りをつかまえた。ちょうどそこにいあわせた女の人たちが品物をそっくり買いとろうとしたので、私はそれをとめ、そいつを追い払った。

一月四日

あいにく、わが家は安全区のはじにある。そのうち、火の手がのびてくるのではないかと不安でたまらない。きのう、またしても近所で三軒放火された。いまこうしているうちにも、南の方で新たに煙がたちのぼっている。それはそうと、市内はあい変わらず闇に包まれている。下関の発電機は無事なはずなのに。幾度も日本側に抗議しているが、さっぱりだ。取り締まりのため軍事警察がおかれてからは、治安は全体的にはたしかによくなったといえるだろう。けれども警察官のなかにもいかがわしい連中がいる。そいつらは見て見ぬ振りをするだけではない。いっしょになって悪事を働くことさえあるのだ。

一月五日

わがジーメンス・キャンプはほかの収容所からあまり芳しくない評判をとっている。韓がちょっぴりよけいに米を配るからだ。なにしろ韓は気がいいから！　いくらなんでも五百平方メートルの庭に六百二人は狭すぎるので、難民を一部、他の収容所に移そうとしたがうま

くいかなかった。ここだけが安全だと思っているので、だれも出たがらない。まあ、しかたないだろう！

衛生状態が気になる。これについては私もどうしていいのかわからない。伝染病がひろがらないといいが。今日の昼までは水が出たのだが、午後になってとまってしまった。電気はまだつかない。それなのに、近所ではいまだに家が燃えている。

登録はまだ終わっていない。何万人もの女の人が乳のみ児をかかえて五列に並んだまま、人によっては六時間も外で待たされている。果てしなく長い行列だ。このきびしい寒さのなか、いったいどうやって耐えているのかと思う。

またもや漢中門が閉まっている。きのうは開いていたのに。クレーガーの話では、門のそばの干上がった側溝に三百ほどの死体が横たわっているそうだ。機関銃で殺された民間人たちだ。日本軍は我々外国人を城壁の外に出したがらない。南京の実態がばらされたら困るからな。

一月六日

ばんざい！　アメリカ大使館のアリソン、エスピー、マクファディエンの三氏がアメリカ

の砲艦オアフ号で今日上海から到着した。すでに十二月三十一日に南京を目の前にしていたのだが上陸の許可が下りず、蕪湖で待機していたのだ。アリソン氏はかつて東京で勤務したことがあり、日本語ができる。

日本の軍当局から米と小麦粉（両方とも軍が略奪したものだが）が買えそうだ。価格は高いが（米一袋十三メキシコドル）、約五万メキシコドル買うことにした。石炭も一万二千メキシコドルぐらい買っておかなくては。難民の蓄えが底をついてきたので早急に手を打つ必要がある。

韓はあまり乗り気ではない。米屋から、中国軍が南京を奪還しようとしていると聞かされたからだ。すでに南西部では砲声が聞こえたという。「そうなれば米だって小麦粉だってただで手に入りますよ」。けれども私は、心ならずも韓に言い聞かせなければならなかった。「決してそんなことにはならないよ」

十時ごろ日本軍のトラックがきて、うちの収容所から下関の発電所の作業員を十五人連れていった。みなしぶしぶ出かけていった。前回、食事をちゃんと与えると約束しておきながら、ろくなものを食べさせてもらえなかったからだ。まったくありつけなかった者もいた。それだけではない。発電所ではなく、市の南部の門のちかくで塹壕掘りをさせられた者も何人かいた。

ていない。だが結局、沙汰やみだ。兵士の処罰といえば、いつだってたかだか平手打ちどまり。それ以上こらしめたという話を聞いたことがない。

せめてもの慰めのつもりだろう、田中氏は、そのあととてもうれしいことを教えてくれた。目下無湖にいるローゼン、それからたぶんヒュルターとシャルフェンベルクの三人が、一月五日に南京に到着するそうだ。ということは、アメリカ大使館の人たちと同じ日だ。そちらからはすでに連絡がきている。

クレーガーは紫金山にいった。天文台は粉々になり、頂上に行く道もかなりひどいことになってはいたが、通れないわけではない。なにもそんなところに行かなくてもいいのに。わざわざ危ない目にあうことはない。のっぴきならない事情でもあれば別だが。ま、だれかあいつにそういってやってくれ！

今日は二階の風呂場でも水がでた。正午には、安全区のあちこちで電気もついたのだが、一時ごろになってまたとまってしまった。たぶん、我々にラジオのニュースを聞かせないためだろう。

給食所と収容所の決算報告で、委員会の財政がかならずしも楽ではないことがわかったが、これには改めてうなってしまった。要するに、働いている中国人がめいめいしっかり手数料を取っていたのだ。なんせここは中国だ。手数料なしにはなにひとつ運ばない。

今日うちの庭で、とほうもない値段をふっかけようとした野菜売りをつかまえた。ちょうどそこにいあわせた女の人たちが品物をそっくり買いとろうとしたので、私はそれをとめ、そいつを追い払った。

一月四日

あいにく、わが家は安全区のはじにある。そのうち、火の手がのびてくるのではないかと不安でたまらない。きのう、またしても近所で三軒放火された。いまこうしているうちにも、南の方で新たに煙がたちのぼっている。それはそうと、市内はあい変わらず闇に包まれている。下関の発電機は無事なはずなのに。幾度も日本側に抗議しているが、さっぱりだ。取り締まりのため軍事警察がおかれてからは、治安は全体的にはたしかによくなったといえるだろう。けれども警察官のなかにもいかがわしい連中がいる。そいつらは見て見ぬ振りをするだけではない。いっしょになって悪事を働くことさえあるのだ。

一月五日

わがジーメンス・キャンプはほかの収容所からあまり芳しくない評判をとっている。韓がちょっぴりよけいに米を配るからだ。なにしろ韓は気がいいから！　いくらなんでも五百平方メートルの庭に六百二人は狭すぎるので、難民を一部、他の収容所に移そうとしたがうま

くいかなかった。ここだけが安全だと思っているので、だれも出たがらない。まあ、しかたないだろう！

衛生状態が気になる。これについては私もどうしていいのかわからない。伝染病がひろがらないといいが。今日の昼までは水が出たのだが、午後になってとまってしまった。電気はまだつかない。それなのに、近所ではいまだに家が燃えている。

登録はまだ終わっていない。何万人もの女の人が乳のみ児をかかえて五列に並んだまま、人によっては六時間も外で待たされている。果てしなく長い行列だ。このきびしい寒さのなか、いったいどうやって耐えているのかと思う。

またもや漢中門が閉まっている。きのうは開いていたのに。クレーガーの話では、門のそばの干上がった側溝に三百ほどの死体が横たわっているそうだ。機関銃で殺された民間人たちだ。日本軍は我々外国人を城壁の外に出したがらない。南京の実態がばらされたら困るからな。

一月六日

ばんざい！　アメリカ大使館のアリソン、エスピー、マクファディエンの三氏がアメリカ

の砲艦オアフ号で今日上海から到着した。すでに十二月三十一日に南京を目の前にしていたのだが上陸の許可が下りず、蕪湖で待機していたのだ。アリソン氏はかつて東京で勤務したことがあり、日本語ができる。

日本の軍当局から米と小麦粉（両方とも軍が略奪したものだが）が買えそうだ。価格は高いが（米一袋十三メキシコドル）、約五万メキシコドル買うことにした。石炭も一万二千メキシコドルぐらい買っておかなくては。難民の蓄えが底をついてきたので早急に手を打つ必要がある。

韓はあまり乗り気ではない。米屋から、中国軍が南京を奪還しようとしていると聞かされたからだ。すでに南西部では砲声が聞こえたという。「そうなれば米だって小麦粉だってただで手に入りますよ」。けれども私は、心ならずも韓に言い聞かせなければならなかった。「決してそんなことにはならないよ」

十時ごろ日本軍のトラックがきて、うちの収容所から下関の発電所の作業員を十五人連れていった。みなしぶしぶ出かけていった。前回、食事をちゃんと与えると約束しておきながら、ろくなものを食べさせてもらえなかったからだ。まったくありつけなかった者もいた。それだけではない。発電所ではなく、市の南部の門のちかくで塹壕（ざんごう）掘りをさせられた者も何人かいた。

午後五時、福田氏来訪。軍当局の決議によれば、我々の委員会を解散して、食料などの蓄えや資産を自治委員会に引き渡してもらいたいとのこと。自治委員会が今後われわれの仕事を引き継ぐことになっているからだという。冗談じゃない。私はただちに異議を申し立てた。「仕事を譲ることに関しては異存はありませんが、これだけはいっておきます。治安がよくならないかぎり、難民は元の住まいには戻れませんよ」。難民の住まいの大半は壊され、略奪されている。焼き払われてしまった家もあるのだ。

さっそく会議を開いて、福田氏にどう返事をしたものかと相談した。また、治安や秩序をとりもどすためにどういう提案をするかについても。日本から助言を得てはいるが、自治委員会はまるで無策だという気がする。どうやら狙いは我々の金だけらしい。つまり、「国民政府からもらったのだから、おれたちの物だ！」というわけだ。

しかし我々の考えは全く違う。なんとしてもこちらの主張を通そうということになった。アメリカやドイツの大使館が支持してくれると当てにしたうえでの結論だ。といっても、先方が果たしてどう考えているのか、まるっきりわからないのだが。

一月七日

福田氏に国際委員会の趣意書を渡す。氏の話だと、なにがなんでも南京の秩序を即刻回復せよ、と東京から厳命があったとのこと。また、行政的な職務（この私、ラーベの「市長職」も？）も我々「よそ者」ではなく、すべて自治委員会が担当すべし、といってきたという。そういわれてしまっては、手も足もでない。願わくは自治委員会にそれだけの能力があらんことを。

南京の危険な状態について、福田氏にもういちど釘を刺しておいた。「市内にはいまだに千ほどの死体が埋葬もされずに野ざらしになっています。なかにはすでに犬に食われているものもあります。でもここでは道ばたで犬の肉が売られているんですよ。この二十六日間というものずっと、遺体を埋葬させてほしいと頼んできましたがだめでした」。福田氏は紅卍字会に埋葬許可を出すよう、もう一度かけあってみると約束してくれた。

きょう午前十時ごろ、私の留守中のことだった。日本兵が一人、使用人の部屋に押し入り、女たちが悲鳴をあげながら私の住居へ逃げこんできた。屋根裏部屋まで追っていったところで、この日本兵は、たまたま私を訪ねてきた通訳の日本人将校に取り押さえられ、放り

出された。占領されて今日で二十六日。南京のヨーロッパ人住宅の治安状況がどんなものか、これでもわかるだろう。

リッグズが今日の視察の報告書をもってきた。うつろな目をした女性がひとり、通りをふらふらさまよっていたという。この人は病院に運ばれ、身の上を話した。十八人家族だったが、生き残ったのはこの人ひとりだという。残りの十七人は射殺されるか、銃剣で突き刺されるかして死んだ。家は中華門の近くだそうだ。わが家の収容所にやはり近くに住んでいた女性がいる。弟が一緒だが、こちらは両親と三人の子どもをなくした。全員日本兵に射殺されてしまったのだ。せめて父親だけでも埋葬したいと、なけなしの金で棺桶を買ったところ、これを聞きつけた日本兵たちが蓋をこじ開け、亡骸を放り出したという。中国人なんかその辺に転がしておけばいいんだ、というのが、かれらの言い分だった。

一月八日

ローゼン、ヒュルター、シャルフェンベルクの三氏が、明日イギリス大使館の二人といっしょに南京にくると福井氏が知らせてくれた。ローゼン、ヒュルターの家はどちらも無事だ。ドイツ大使館も。ただローゼン家からは車と自転車、それから酒が数本盗まれた。イギリス人の家の様子はわからない。シャルフェンベルクの家は安全区の外だったこともあって、ひどい荒らされようだった。ヒュルターの家に泊めてもらわなければなるまい。こまったことに、どこも電気や水がとまっている。そこで福井氏にまた手紙を書いた。アメリカ大使館の人たちの家も同じ状態らしい。みな、寒い寒いと言いながら、大使館の大きな暖炉にへばりついているという。電気や水が使えるよう、日本軍に要求すればいいと思うのだが。

福井氏がいうには、日本大使館が国から新しい車を取り寄せるそうだ。ドイツ大使館員に、おそらく他の大使館にもだろうが、盗まれた車を弁償するという。

今日、中国人の間で、中国兵たちが南京を奪いかえそうとしているという噂が、またもやひろまった。それどころか、市内で中国兵の姿をみかけた、という話まで出ている。まず、安全区の家々に飾られていた小さな日の丸がそっくり姿を消した。日本の腕章も。中国人のほぼ全員がつけていたのだが。そしてつい今し方、ミルズが教えてくれたところによると、相当数の難民が日本大使館を襲おうと考えていたという。

このときのささやかな暴動に加わった人たちは死刑になった。いままで安全区が平穏でいられて、本当によかった。どうかこういう悲惨なことにならないようにと祈るばかりだ。

ベイツが貸してくれた日本の新聞の中にこのような記事があった。

東京日日新聞　（一九三七年十二月十七日）

再び正常な状態に！

中国人の商人たちは新しい店を開くべく準備中！

南京。一九三七年十二月十五日。

略奪を働いていた中国人が一掃されたいま、南京市はじきに正常な状態に戻ると思われる。中国人の商人達は、商売を再開するために安全区を去った。平和と秩序が日本の警察によって保たれるであろう。国民政府の特に重要な建築、たとえば如行最高法院、財政部、中央軍官学校、中央航空学校などには衛兵が配置されている。

注・この東京日日新聞の記事は見あたらない。

一月九日

午前十時。自治委員会のメンバー、王承添（通称ジミー）との談合。数日前、国際委員会の活動を日本軍が力ずくでやめさせようとしていたと聞かされる。結局これは実行には移されなかったが、我々は今後難民に米を売ってはならないことになった。もし、自治委員会が販売を引き受けるというのなら、異存はない。

ローゼン家とヒュルター家、それから大使館にいってみた。どこも問題はないが、電気も

水もとまっている。

十一時にクレーガーとハッツが本部に来て、たまたま目にするはめになった「小規模の」処刑について報告した。日本人将校一人に兵士が二人、山西路にある池のなかに中国人（民間人）を追いこんだ。その男が腰まで水につかったとき、兵士のひとりが近くにあった砂嚢のかげにごろりと寝ころび、男が水中に沈むまで発砲し続けたというのだ。

ローゼンとヒュルター、シャルフェンベルクの三人がイギリス砲艦クリケットで到着した。イギリス大使館の役人三人とプリドー＝ブリュン領事、フレーザー大佐、空軍武官のウォルサー氏もいっしょだった。だがウォルサー氏は、事前に報告しなかったといいがかりをつけられて、上陸させてもらえなかった。

午後二時、クレーガー、ハッツ、私の三人で、ドイツ大使館にいった。三時に、日本大使館の田中、福田両氏といっしょにローゼンたち三人がやってきた。我々はクレーガーがどこからか接収してきたシャンパンで歓迎の意を表した。ローゼンは、盗まれた車の代わりに、豪華なビュイック一台と、ドイツ大使館の公用車にと、フォードを一台、日本から借り受けた。ぜったいに返すものかと息巻いている。それからみなでシャルフェンベルクの家に行ってみた。家中ひっかきまわされ、目も当てられない状態だ（写真21）。大切にしていた品のなかでも彼がとくに残念がったのは、シルクハットとネクタイだった。なにしろ四十本もあ

ったのだ。今度また休暇で日本へ行ったら、みなでぬかりなく目を光らせ、シャルフェンベルクの高級ネクタイをしている奴をとっつかまえてやろうということになった。

それを除けば、シャルフェンベルクは冷静だった。怒り狂うのではないかと思っていたのだが、そんなことはなかった。三十七年間中国にいる間に、めったなことでは動じない人間になっていたのだ。

夜八時。ドイツ大使館の三人とクレーガーを夕食に招いた。ワインもある。クレーガーが以前、シャルフェンベルクの家から失敬してきたものだ。そしてジャーディン海運社の船客のその後の様子、それからビー号とパナイ号のことを話してもらった。

ヒュルターが、ドイツ外務省にあてたローゼンの報告書を読み上げた。「ここ南京に残っている二十二人の外国人は、ローマの闘技場でライオンに食われた原始キリスト教徒に劣らず勇敢でした。けれども、ライオンは、どうやら欧米人より中国人の肉がお好みのようです」日本軍をどう思うか、と聞くと、ローゼンは返事の代わりにトルコのことわざをひいた。以前、コンスタンティノープルの公使館に勤めていたことがあるのだ（ラーベの思いちがいでこれはローゼンの祖父）。「橋の上で雄やぎといるかぎり、君はやぎに『おじさん』とよびかけなければならない」。つまり、長いものにはまかれろということか。

八時にいよいよ食事を始めようとすると、近所の家から火の手があがった。外交官がやって来ようと、放火を命じられた日本兵はすこしも気にならないようだ。

一月十日

ローゼンが、手紙を持ってきてくれた。ドーラのはもちろん、ミュンヘンにいる二人の子ども、グレーテルとオットーのもある。そのほかに『ティルマンの息子たちの物語』というきれいな本とソーセージ二本、クネッケパン二パック、インシュリン、バター一キロ。こんなにいろいろ贈り物に囲まれると、なんだか慰問袋をもらった兵隊のような気がする。

九時

クレーガーが、石田少佐から返事をもらって帰ってきた。日本軍はなんと、我々に米や小麦粉を売ろうとしない。はっきり約束したくせに。自治委員会だけに売ろうというのだ。我々のほうでは、言われたとおり今朝早々と米の販売を中止してしまった。難民たちはひどくがっかりした。自治委員会がまだ専用の販売所を開いていないからだ。これは大変なことになる！

ローゼンが本部に訪ねてきた。日本軍は、私にだけでなくローゼンにも、報告書に少し手加減してもらいたいといってきたという。ローゼンはいった。「だから、『あなた方に水と電

気をとめられたと報告しておきましょう』といってやりましたよ」

十六時

自治委員会は、安全区のなか、我々の本部の近くに販売所をつくった。これで、さしあたっての最大の難問は解決したことになる。アリソン氏に引き合わせるため、ミルズは私をつれてアメリカ大使館に行った。これまで我々が日本大使館に毎日提出してきた、ひきもきらない日本兵の犯罪に関する報告書を代わって作ってくれることになったのだ。

（個人用覚え書きの日記から）

ヒュルターから聞いたところでは、クトゥー号の船内で、P氏とV・S氏が衝突したそうだ。その結果、P氏はV・S氏に（武器はピストル、距離は三十歩の）決闘を申しこんだ。そうこうしているうちに、二人は香港についた。だが、香港では決闘がゆるされていないので、ドイツにもちこまれることになった。その後P氏もV・S氏も別々の船で帰国した。まったくなにをかいわんやだ。我々はここで、命がけで他人の命を救おうとしているというのに、同じドイツ人が自分の命をもてあそんでいるとは。

一月十一日

イギリス大使館を訪ね、プリドー＝ブリュン領事、フレーザー大佐、ローゼン、アリソン、ヒュルター各氏と会う。イギリス、ドイツ、アメリカの各大使館が私の頼みを引き受けてくれた。頼みというのは、日本兵の違法行為に関する日々の報告を我々から受け取って、日本大使館あるいはそれぞれの国の政府に転送することだ。こうしてもらえれば委員会はうんと助かる。もし、それぞれの大使館が今後も日本軍に抗議し続けてくれれば、じき、状況は良くなるかもしれない。

今日、日本軍に米の供給を禁止された。昼、我々が自治委員会のために手配した米の輸送が止まった。

午後、私がまだ本部にいたとき、日本の警察がやってきて家捜しをした。脱走兵が略奪した古着を探しているという。その服は、数日前、その兵士からうけとって本部のフィッチの事務所にしまってあった。たまたまフィッチの部屋だけに鍵がかかっていたため、怪しまれてしまった。だが、警官がドアをこじ開ける前に、クレーガーが現れ、鍵を持ってこさせて、はいよ、と服を渡した。

まったく日本の警察のやりかたはわけがわからない。おだやかに入ってきても、我々はやはりあっさり渡しただろう。なにも完全包囲することなどないのだ。中国人脱走兵が服を略

奪したと聞いて、それをネタに「事件」をでっちあげようとしたらしい。今度こういう目にあったらどうすればいいか、大使館と相談しておかなければ。

一月十二日

南京が日本人の手に渡って今日で一ヵ月。私の家から約五十メートルほどはなれた道路には、竹の担架に縛りつけられた中国兵の死体がいまだに転がっている。

ドイツ、アメリカ、イギリスの大使館を訪ねて、昨日の家捜しを報告し、ローゼン、アリソン氏、プリドー＝ブリュン各氏と相談した。この件について、全員の意見が一致した。すなわち、日本の警察は、外国人の建物に入るときには、その国の大使館へ事前に連絡するか、もしくはその国の大使館員を同伴する義務がある、ということだ。

こうしているあいだに、米の販売が全面的に中断されてしまった！　米だけではない、石炭も安全区に運びこめなくなった。日本軍は塀に貼り紙をして、自分の住居に戻れといっている。肝心の家が焼き払われたり略奪にあったりしていることなんか、てんでおかまいなしなのだ。

日本人と友好的にやっていくにはどうするかとあれこれ考えた末、あることを思いついた。南京安全区国際委員会を解体して、国際救済委員会を設立し、日本人にも出席してもら

うのだ。

本作品は一九九七年十月、講談社より刊行されたものを、文庫収録にあたって新たに加訳、修正、再編集したものです。

著者|ジョン・ラーベ　1882年ハンブルク生まれ。1911年にドイツの世界的コンツェルン、ジーメンス社に入社。ナチ党員。日中戦争が深刻化し、首都南京が陥落したときは当地の支社長だった。日本軍占領下の南京で、国際安全区委員会の代表となって中国人を救おうと奔走する。その時の状況を詳細な日記にも記していた。1950年、ベルリンにて死去。

訳者|平野卿子(ひらの・きょうこ)　翻訳家。お茶の水女子大学卒業後、ドイツのテュービンゲン大学留学。ドイツ文学専攻。立教大学、明治大学講師。主な訳書にベンヤミン・レーベルト著『クレイジー』(文藝春秋)、ゾエ・イェニー著『花粉の部屋』(新潮社)、クヴィント・ブーフホルツ著『見えない道のむこうへ』(講談社)、ビルガー・ゼリーン著『もう闇のなかにはいたくない』(草思社)、クリステル&イザベル・ツァヘルト著『わたしの天国でまた会いましょうね』(集英社)などがある。

南京の真実

ジョン・ラーベ 著|エルヴィン・ヴィッケルト 編
平野卿子 訳
© Kyoko Hirano 2000
2000年9月15日第1刷発行

講談社文庫
定価はカバーに表示してあります

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話 出版部 (03) 5395-3523
販売部 (03) 5395-3626
製作部 (03) 5395-3615
Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国印刷株式会社
製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは学芸図書第三出版部あてにお願いいたします。(学三)

ISBN4-06-264994-2

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。